



日本昔話記録 12

鹿児島県 喜界島昔話

柳田国男 編／岩倉市郎 採録



日本昔話記録12 鹿児島県喜界島昔話集

昭和四十九年二月十日 印刷
昭和四十九年二月十五日 発行

編者 柳田 國男

採録者 岩倉 市郎

発行者 株式会社 三省堂（代表者 亀井 要）

発行所 株式会社 三省堂

東京都千代田区神田神保町一―一

電話 東京（〇三）二九三―三四四一（代表）

郵便番号 一〇一 振替 東京五四三〇〇

全国昔話記録趣意書

今まで心づく人が少なかったやうだが、斯ういふ昔話は全国の隅隅、どこに行つても大抵は残つて居る。さうして土地により又家によつて、その伝はり方が少しづつ變つて居る。話の大筋は一樣であり、力の入れ所もほぼ同じであるに拘らず、或ものは長く詳しく、又は二つを繋ぎ合せて居るものもあると同時に、他の多くのものは叙述を省き、もしくは子供などの面白がる部分だけを、手短かに語らうとするやうにもなつて居る。つまり昔話は我々日本人の間に於て、曾て大いに成長し、今は又嗣いで興つた第二の文芸に、其地位を譲つて退き隠れようとして居るのである。全国昔話記録の目的とする所は、單にこの隠れてやがて消えてしまふものの、保存といふ様な小さな仕事だけでは無い。第一には昔話の起原、どうしてこの特色多き一種の口碑だけが、遠くは数千年前の埃及・印度を始めとし、古今東西のあらゆる諸民族に行き渡り、しかもその相互の間に数多い類似をもつかといふことであるが、是は現在の人智を以てしては、実はまだ解けない問題であつて、其為には今まで得られなかつた新資料と、新たな角度からの觀察とが、何物よりも痛切に要望せられて居る。我々日本人の採集と研究とは、この二つの要望に応ずべく、ともかくも極めて新らしいものである。

第二の今一段と關心の多い問題は、このまだ起原を究めることの出来ない日本の昔話の、過去少なく

とも千年間の變遷が、果してどういふ新たな知識を、我々に供与するであらうかといふことである。昔話は我々同胞の間に於て、殊に近世に入つてから変れるだけ變つて居る。即ちどうしても省くことのならぬ要素は存置して、その他の部分に於ては自由なる加工をして居る。この思ひ思ひの地方的改造の中に、之をさう改めずに居なかつた一回限りの原因が、探り得られるかどうかといふことが問題になるのである。外から働きかけた力としては、時代時代の學術技芸、とりわけてそれを職業とした人々の活躍と交通が考へられ、之を内にしては各人の趣味と鑑別、私等の名づけて常民の文芸能力といふものが、多くの暗黙裡の注文を以て、昔話の旧形を取捨し、新たに附加はるものの選択を左右したことは、恐らくは昔も今も同じかつたらうと思ふが、さういふ歴史は記録には全く載つて居ない。たゞ僅かに受身の側の影響の痕から、遂に国民の常の日の生活を動かして居たものと、窺ふの他は無いのである。

第三の問題としてはそんな六つかしい帰納が、果して今でも出来るかといふことであるが、是は私は実績を以て、証明するのがよいかと思つて居る。日本人の多数が、家に親切な又物覚えのよい年寄もち、夜毎にその話を聴いて耳を悦ばせ、心を清うして育つて居りながら、たまたま遠国の片田舎にも、よく似た話の有ることを知つて、幼なかつた日の思ひ出を蘇らせるまで、それをめいめいの故郷だけの、何でも無い小さな事実のやうに考へて居たこと、もしくは僅か話の一端を聴いて、その話なら私の方にもあつたと、すべて同一のものしか無いやうに、独りできめて居たといふことなども、我々の学問に取つては一つの好い足場である。たとへば今度のやうな昔話集が続刊せられて、單なる家庭の小現象の如く見られて居た昔話が、既に国内に充満し、更に又縁もゆかりも無い天涯の異人種の間すら、なほ

屢屢行はれて居るといふことを聴き知つたならば、驚き又悦ぶ人は必ず多いであらうし、それが様々の増減潤飾を以て、殆ど土地毎に又は人毎に、ちがへて記憶せられて居ることに氣が付いたとき、それは又どういふわけであらうかと、始めて人間文化の不可思議に、心を打たれる者も必ず現はれて来るのである。少年の日の回想は概して楽しいが、さういふ中でも昔話のやうに、純なる味歎と微笑とに充ち溢れたものは少ない。境遇の許さなかつた人々は別として、いやしくも心の奥底に記憶を留めて居るほどの者ならば、斯ういふ話を聴いてにつこりとせぬ人はあるまい。それが此次の大平和期に入つて、將に大いに起るべき学問の苗木であることを知るならば、更に又感激の新たなるものがあらう。しかも今日の話題の増加、好奇心の展開は無限であるが故に、折角親代持ち伝へたものを、後に残さずに行つてしまふ人が、急に此頃は多くなつて居るのである。せめてその一部分なりとも引留めて見ようといふ願ひから、全国昔話記録は計画せられた。この小さな巻巻が幸ひにして世に行はれ、或は町と田舎の古風なる炉端に、さては又異域の陣營の徒然の燈火の下に、之を読んで幼時の追懷を共にする人の数が多くなつて来れば、同時にそれは又昔話研究の新機運を、促進する力ともならずには居ないであらう。

我々の昔話集は、大体に一つの島、又は一つの郡を以て単位としようとして居る。さうして出来るだけ比較を有効ならしめんが為に、努めて懸け離れた土地のものを、組合せて出して見るつもりである。

一人の伝承者のものもつものを、一卷に集めて置くことは理想であるが、そんな沢山の話覚えて居る人は、今日はもう稀になつた。已むことを得ずんば同じ土地の、幾人かの知つて居るものを集めて見るのもよい。学校その他の大きな団体で、手分けをして集めるのは効を奏しやすいが、其代りには中には不得手

な者もあつて、抜かしたりまちがへたりして採つて来る者が無いとは言へない。磐城昔話集の岩崎君のやうに、細心な注意を以て之を整理し、又精撰する必要があるわけである。次には昔話の編集の方法であるが、是は銘々の最も面白いと思つたものから、順々に並べて行くのが自然でよい。主たる目的は一般の読者を、少しの骨折も無く我々の興味に、共鳴せしめるに在るからである。昔話の文体はこの意味に於て、最初から定まつて居ると言つてもよい。即ち話手の口から出て、聴手の耳に入つて来る言葉以外に、書物で学んだやうな新しい文字を、一つでも使はないことである。さういふ文字が交つて居ては、たとへ翻訳に少しの誤りは無くとも、読む者にはもう昔話だといふ感じがもてないからである。上手な精確な話手を見つけることも必要だが、其話を忠実に、聴いた形のまゝで伝へるといふことは更に大切で、是が昔話採集のただ一つの、技術とも言へない技術である。

我々は今から五六年前に、『昔話採集手帖』といふ小さな本をこしらへて、地方に居る同志の人々に頒つたことがある。日本にどういふ種類の昔話が、どれだけ程行はれて居るかといふことを知るには、是も多少の参考にはなるが、本来手帖だから余白を残す為に、記述が簡略に過ぎ、順序も亦我我の一つの考へ方に依つて居る。今後の採集者は必ずしも之に従ふに及ばぬのは勿論である。しかし昔話の名をきめる為に、時々斯ういふものを見なければならぬ場合もあるので、其うちにはもう一度、改訂を加へて出して置かうと思つて居る。なほこの以外にも言つて見たいことはあるのだが、それは此事業の進行と伴うて、何等かの形を以て追々に発表して行かうと思つて居る。

昭和十七年六月

柳田國男
敬啟

目次

全国昔話記録趣意書

一	竜神と漁夫	1
二	竜神と花売り	3
三	竜宮女房 (一)	7
四	竜宮女房 (二)	10
五	竜宮女房 (三)	13
六	竜神と釣縄	16
七	天人女房 (一)	18
八	天人女房 (二)	21
九	天人女房 (三)	22
一〇	太陽の下し子	23
一一	蛇婿入 (一)	25
一二	蛇婿入 (二)	27

三	蛇女房	28
四	猿婿入	31
五	炭焼五郎	32
六	寅千代丸	33
七	西のバンコイ	37
八	アンジンとマグズミ	40
九	灰坊太郎(一)	43
一〇	灰坊太郎(二)	45
一一	難題婿(一)	47
一二	難題婿(二)	49
一三	駕籠担ぎ婿	50
一四	嫁の駕籠に小牛	52
一五	継子と山の神	53
一六	手無し娘	56
一七	七羽の白鳥	58
一八	三人兄弟(一)	61
一九	三人兄弟(二)	64

㊦	三人兄弟 (一)	66
三	二人兄弟 (一)	69
三	二人兄弟 (二)	72
三	金の茄子	75
三	大歳の客 (一)	78
三	大歳の客 (二)	80
三	鶏の恩返し	82
三	猫の恩返し	84
三	狐の恩返し (一)	85
三	狐の恩返し (二)	87
三	河童の恩返し	88
三	聴耳笠	89
三	不思議な小箱	91
三	運定め話 (一)	92
三	運定め話 (二)	95
三	お歳をもらった娘	96
三	歌い骸骨	98

望 歌い井 99

罌 旅人馬 101

咒 話買い(一) 103

罌 話買い(二) 106

罌 金を放る犬 108

罌 アサナローの花 109

罌 油取り 111

罌 椎の木山の妻 113

罌 阿豆山の鬼 114

罌 鬼退治 115

罌 鬼の子 116

罌 姉妹と鬼 118

罌 弘法様と鬼 121

罌 火車の化物 123

罌 獵師と飼猫 125

罌 隠れ里 127

罌 千人力 128

四	力王の話	131
五	鼠になった嫁	133
六	山彦	135
七	漂流した父	136
八	花良沿の漁石	138
九	宝の化物	139
一〇	亡者と塩買い	140
一一	三人の法螺	141
一二	片荷	142
一三	和尚と小僧	144
一四	ひなた山	146
一五	馬鹿息子	147
一六	鳥と螻蛄	148
一七	雀と川蟬	149
一八	あまやくの孝行	150
一九	蛸の骨なし	151
二〇	猫と蟹の駆競べ	152

二 兄弟 153

三 三男が後取り 154

三 大和言葉 155

四 天気見 156

五 口賭け 157

六 頭の木 158

七 夢見童子 159

八 月と太陽 159

九 首のない影 160

九 煙草の起り 161

九 五月五日の餅 162

九 継子話 163

九 下男と猫 164

九 プンブン太鼓 165

九 王様の難題 167

九 雉も鳴かずば 168

九 身守りの手拭 169

九	二十三夜様	169
九	神様と魚	171
一〇〇	ウツワ舟	172
一〇一	姑の歌	173
一〇二	昔世の初り	174
一〇三	王様とミヤ草	175
一〇四	猿の親切	176
一〇五	賭け話	177
一〇六	魔法使いと白骨	177
一〇七	くもの玉	179
	再版解説	180
	岩倉市郎氏を偲ぶ	190
	岡見正雄	
	桜田勝徳	

凡 例

この集に収めた昔話は、(一)昭和七年四月から十一月迄の間に郷里喜界島で採集したものと、(二)昭和八年の夏に大阪で、同郷喜界村上嘉鉄出身の春里市武老(当時六三歳)から聴取したものとで、前者は『島』に後者は『昔話研究』及び『旅と伝説』第二昔話号(七卷十二号)に、それぐ既に発表した。郷里での採集地及び主なる話者は次の通りである。

鹿児島県大島郡喜界村浦原

故富実禎(当時六二歳)

同

早町村阿伝

福元常有(当時六七歳)

津田豊信(当時六一歳)

故東オメト(当時六八歳)

故浜畑行英(当時七〇歳)

同

早町村志戸桶

同

早町村小野津(但出生地)

岩倉スエ(当時五七歳)

其他 十余名

一 竜神と漁夫

志戸桶しとおけの何某なにがしという男「何てえら云う男」が、炬火ていや磯道具いそ道具（漁具）を一人持で夜漁いだいに行ったところが、その夜はどうしたことか大きなハチー（魚の名）が思いきって取れて、背負せおつて帰るのもやつとであつた。この分なりば明晩もたくさん取れるに決りじやと、翌日はテーにする黍穀きびがら（甘蔗穀）をうんと妻に干させておいて、自分はゆっくいと昼ひるごろまで寝た。

晩になると男は潮加減を見て、炬火をうんと背負うて浜へ下りた。ところが今まで晴れてビツタイ風とれた（風ないだ海をトウリヌミという）夜であつたが、急に大雨が降り出して、その雨が降りも降らんもたちまちの間に炬火からからだまでズブリにしまつた。ハーこれは昨晚あまり魚を取り過ぎたのでネインヤ（ネイーヤ、ネインチャとも。龍宮。海の底にある神の住む浄土。）の神様が自分を怒つてこんな大雨降らしたに違いネエらん。今晚はもう帰ろう。じゃがせめてぬれた炬火でも海に投げ込んでネインヤの神にさし上げたら、今度のところは自分をゆるちくりうも知りらん（赦してたばらうも知れない）とこう思つて、「ソラ神様得リン（得られ）そうれ。」と叫んで有共あいどうも（あつたきの）（全部）炬火を海の中に投げン込んだ。すると不意に後ろの方で「一時待いっときつちたぼうり（たぼうれ）。」という声がするの